

ソロモン諸島で咲かせたソフトボールの「花」、普及の最前線

文・写真 井上 栄 (青年海外協力協会)

最終回

課題と今後の展望



いのうえ・さかえ/1980年12月11日生まれ。愛知県出身。小学校からソフトボールを始め、大学までプレー。卒業後は愛知県公立中学校に体育教諭として勤務。2007年に退職し、青年海外協力隊に参加してジンバブエ共和国(07年6月~08年3月)、ソロモン諸島(08年8~09年12月及び10年4月~11年3月)に赴任。帰国後は、星槎名古屋中での勤務を経て、公社・青年海外協力協会に所属して駒ヶ枝青年海外協力隊訓練所に勤務。

帰国前の最後の活動だった
第2回大会は、学校派遣コーチ、審判などすべての規模が拡大しての開催となりました。第1回大会からの参加校にも新しい選手が多く加わっていました。また、新しく参加した4つの学校には、地域リーグに参加している選手たちがコーチをしていました。競技紹介の巡回をしていたとき、リーグ戦参加者の住居エリア近くにある学校を中心に行っていたのが最後になって功を奏しました。どの学校を巡回に訪れても、経験のある学生から初心者まで学生へ教える姿がありました。

8校でのリーグ戦後、上位4校での決勝トーナメントを実施。わずか数カ月とはいえ、経験の長い第1回大会から参加の4校が決勝トーナメントに進出し、決勝は、第1回大会優勝校と3位校の戦いとなり、延長戦の末、3位校が優勝。試合後のテレビインタビューでは昨年の悔しさ、今大会のための練習、そして、学校にトロフィー

をもたらすことができたことを誇らしげに語ってくれました。翌日の新聞には、裏一面にトロフィーを掲げる写真が掲載され、ここまで大会の認知度が上がったことも一つの成果としてうれしかったです。

こうして協力隊員としてのすべての活動を終え、今後ソロモン諸島でソフトボールが普及し、技術が向上していくためにも本当に多くの課題があることがはっきりしました。

一つは、ルールへの正しい理解です。コーチ、審判とも第2回大会で大幅に増加しました。しかし、コーチングクリニックや審判講習を実施することができなかったのが、ルールへの理解の差がかなり出てしまいました。真剣に練習し、大会に参加する分、試合中の判定へ抗議する場面を見ることも多くありました。残念



第2回大会の表彰式(写真下)。優勝チームには、用具一式が贈られた。その様子は翌日の現地新聞でも大きく扱われた(写真左)



ソロモン諸島 Solomon Islands
首都: ホニアラ (ガダルカナル島)
人口: 約53万人
言語: 英語、ピシン語
面積: 2万8,900km² (岩手県の約2倍)
大小約100の島々からなる英連邦の一角で、4000もの集落が点在している。地理的にオーストラリアとの関係が深く、日本ともいろいろな面で友好を結んでいる。国民の大半が農業・漁業に従事しているが、近年は天然資源の開発で注目を浴びる。



なことに第2回大会の準決勝で敗退したチームから、「この審判のレベルでは、今後参加したくない」と言われてしまいました。今後、技術レベルを上げていくためにも審判員の養成は、避けては通れない課題です。

ソロモンソフトボール連盟は、国際ソフトボール連盟(I.S.F.)に所属しています。しかし、2010年時点では、08年からの登録料が払えず、滞納をしている状況でした。用具援助やコーチングクリニック、審判講習は、この登録料を納入していれば、I.S.F.の下部組織であるオセアニアソフトボール連盟(O.S.C.)に依頼し、実施してもらう権利があります。しかし、年200米ドル、滞納も合わせると600米ドルの支払いは困難を極めます。大会運営以上のお金をどう生み出していかは大きな課題です。

そして、この問題に拍車をかけているのは、ソフトボールがオリンピックスポーツから除外されたことです。ソロモンだけでなくどの国においてもオリンピックスポーツであるかという大きな課題です。

多くいるのですが、その機会を提供する人材を育成し、ノウハウを共有することはできません。私が赴任直後にリーグ戦の運営組織を立ち上げたものの、彼らにすべてを任せることはできず、彼らが主体的に大会を開催する状況には至りませんでした。

大会を終え、参加校の一部にソフトボール用具を提供しました。12年8月にソロモンを訪問し、何校かを訪れた際は、学校のスポーツデーや体育の授業でソフトボールを続けていると話してくれました。また、わずか1週間の訪問でしたが、一緒にソフトボールの試合をすることもできました。現在も「ソフトボールをしたい」とソロモンの友人から連絡を受けます。本誌での連載が縁でソフトボール用具を提供していたとき、その用具をソロモンへ届けることもできました。その用具は、学校ではなく、最も競技人口の多いコミュニティに提供しています。学校や地域内で少しずつでもソフトボールが継続され、競技人口が拡大すれば、いつか大会が自主的に開催されるのではないかと信じています。

親善試合を行いました。老若男女が楽しむことができるソフトボール。途上国でのソフトボールの普及は、一朝一夕では叶いませんが、確実に広がりを見せています。今後は、私は違った形で世界中でソフトボールの普及、技術向上のために活動する現役の青年海外協力隊員を応援していただけたらと思います。よろしくお祈りします。1年間、ソロモン諸島の普及について読んでいただきありがとうございます。



大会を終るにつれてユニフォームをそろえるなど各チームの意識が高まった(サッカーのユニフォームなのはご愛嬌)

また、それ以上に連盟の人材不足は深刻な問題です。全員がボランティアで連盟の仕事にかかわっており、それぞれの職場での地位が上がるにつれ、どうしても連盟での仕事に時間を割けないようになってしまいました。ソフトボールをしたい人は

折っていくことを祈っています。その一端を担うことのできる協力隊員の派遣を増やそうと、日本ソフトボール協会もアジアの連盟に働きかけを始めています。

継続的な活動はできなかったものの巡回校の一つは、練習に多くの女子生徒が参加していました。1年間に2度だけでしたが、一般女子と中高生チームで親善試合を行うこともできました。老若男女が楽しむことができるソフトボール。途上国でのソフトボールの普及は、一朝一夕では叶いませんが、確実に広がりを見せています。今後は、私は違った形で世界中でソフトボールの普及、技術向上のために活動する現役の青年海外協力隊員を応援していただけたらと思います。よろしくお祈りします。1年間、ソロモン諸島の普及について読んでいただきありがとうございます。

女性限定の親善試合(写真右)、ピッチングクリニック(写真左)。人、金銭、環境に問題が山積みだが、ソフトボール競技者は確実にソロモン諸島で広がっている



女性限定の親善試合(写真右)、ピッチングクリニック(写真左)。人、金銭、環境に問題が山積みだが、ソフトボール競技者は確実にソロモン諸島で広がっている

Information 半世紀の活動を経て

2015年で創設50周年を迎える青年海外協力隊。JICAボランティアのHPには、その記念ページが開発されている。またHPでは常時、応募者への情報提供だけでなく、帰国したボランティアへの情報提供も行っている。ボランティアに応募する人が不安を持つ帰国後の進路を支援するため、JICAでは帰国後研修を始め、全国各地に進路相談カウンセラーを配置している。また、日本国内外への大学、大学院などに進学したい場合には、「帰国隊員等教育訓練手当」という制度がある。
HP/ <http://www.jica.go.jp/volunteer>